

博士学位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

第 9 号

2020年3月

同朋大学

はしがき

この要旨集は、学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 8 条の規定による公表を目的として、2019 年度に本学において博士の学位を授与した者の「論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨」を収録したものである。

学位記番号に記した学位規則第 3 条第 1 項（いわゆる課程博士）によるものであることを示す。

目 次

学位記番号	学位の種類	氏名	学位論文題目
文博甲第 15 号	博士（文学）	日比野 洋文	西鶴浮世草子の好色物における 主題とその表現方法

氏名(本籍地)	日比野洋文(愛知県)		
学位の種類	博士(文学)[同朋大学]		
学位記番号	文博甲第15号		
学位授与月日	令和2年3月23日		
学位授与の要件	同朋大学学位規定第3条第1項該当		
学位論文の題目	西鶴浮世草子の好色物における主題とその表現方法		
論文審査委員	主査	本学特任教授	博士(文学) 服部 仁
	副査	本学教授	福田 琢
	副査	本学教授	博士(文学) 安藤 弥
	副査	京都府立大学教授	博士(文学) 藤原英城

13-7201 日比野洋文

「西鶴浮世草子の好色物における主題とその表現方法」

内容の要旨

(構成)

はじめに

第一章 『椀久一世の物語』における盗作とその悪化

第一節 主人公の人物像

第二節 異常性の正体

第三節 各章の関係①

第四節 各章の関係②

第五節 小結

第二章 『好色一代女』における「二項対立」構造の再検討

第一節 先行研究

第二節 構想

第三節 モチーフ

第四節 モチーフの出現①

第五節 モチーフの出現②

第六節 主人公の職種

第七節 主題

第八節 小結

付録

第三章 『色里三所世帯』の構造

第一節 心理描写

第二節 「もてあそび」と「執心」

第三節 各巻の内部構造

第四節 物語の全体構造

第五節 三都の配置

第六節 主人公の人物像

第七節 小結

付録

おわりに

(内容)

本論文では、井原西鶴の好色物に数えられる『梶久一世の物語』『好色一代女』『色里三所世帯』の浮世草子三作品を取り上げ、各作品の主題と、その表現方法の分析を通して、西鶴らしさというべき主題の表現方法の特徴を検討する。

第一章では『梶久一世の物語』の主人公が、物語後半から結末にかけて「狂人」と化し、自己の異常行動によって命を落とすことに注目し、主人公の精神異常の悪化を描いた物語であると想定して、それが如何なる方法によって映し出されているのかを検討する。

「むしやうといふ男」や「狂人」と評される主人公であるが、その異常性の実相は、認識と行動の不一致という言わば倒錯である。そうした主人公の倒錯した行為は、一章(一話)だけでなく、始巻から終巻に至る隣接する巻にも、巻をまたぐ形で出現している。すなわち、主人公が弁才天より授かった財力を自己の倒錯した判断により浪費を開始する始巻から、「しやつら二つに、刀握れば覚えありと、竹杖をすりと抜けば」という倒錯した言動がもとで命を落とす終巻まで、各巻は主人公の倒錯した行為によって鎖のように接続されているのである。

そして、上巻の四、上巻の七、下巻の三を境とした前後の巻における主人公の倒錯した行為には、相関関係が存在している。この三巻を境とした前後の巻における主人公の倒錯した行為に、相関関係が存在するという事は、物語が進むにつれて、既視感のある倒錯した行為の出現頻度が高まることを意味する。つまり、当該三巻を境とした主人公の倒錯した行為の相関関係とは、過去と現在の境遇を対比するものであり、かつ、物語が進むにつれて過去と現在の重なりが増すことによって、倒錯という異常な実体を浮かび上がらせる構造なのであり、主人公の異常性の段階的悪化を映し出しているのである。

結末で命を落とす主人公の人生は、財力の獲得、散財、破産、松山との離別、狂人化という具合に、転落の一途を辿る。この人生の転落は、自己の認識と行動の不一致という倒錯が原因であるように、各巻における主人公が経験する出来事は、倒錯によって接続されている。さらに、その倒錯する姿を物語の進行とともに、既視感という形で重ねていくこ

とによって、自己の倒錯によって死すべき運命にある、その倒錯の悪化が映し出されているのである。

第二章では『好色一代女』を取り上げ、従来から指摘される性の過剰と性の欠如の二項対立の構造に注目し、この観点から主人公の回想が映し出すものを検討する。始章には相反する性の永続の願望を語る二人の若者と、彼らが抱く願望の実現を不可能であると否定する観察者が登場する。従来、この二人の若者については、「性の過剰」と「性の欠如」のモチーフを提出する存在であると指摘されている。筆者はこの指摘に加え、二人の若者と観察者が、性の過剰な追求と、その否定（性の破綻の不可避）というモチーフを提示する存在でもあると想定して、主人公の回想の分析を進める。

主人公は二人の若者に乞われ過去を語るが、この過去というのが、まさに性を過剰なまでに追い求めた歴史である。回想に登場する主人公は、終末において、自己の性が限界に達すると大雲寺に参詣し、安置されていた五百羅漢像にかつて関係を持った弱蔵や強蔵といった男たちの面影を見出す。主人公は彼らの死（性の破綻）という現実を通して、ときに強蔵（性の過剰）や弱蔵（性の欠如）を相手に、性を過剰なまでに追い求めてきた自身には、自己の命以外何も残されていないという虚しい事実を認識する。始章では性の過剰な追求（性の過剰と欠如）と、その否定（性の破綻の不可避）のモチーフが提示されていたように、有限である性を追い求めることの虚しさが作品の主題なのである。

そして、「性の過剰」と「性の欠如」が一方のみで成立しない相対的なモチーフであるように、作品を構成する各章には、これを表示する二人（若老、粹無粹、美醜、など）が登場し、彼らの破綻の様子（性の破綻の平等）が映し出されている。さらに、この相対的なモチーフとそれを表示する二人は、各章の内部だけでなく、隣接する二章や、隣接する巻の同数の二章、主人公の職種（遊女期・非遊女期）に基づいた二章といった様々な位置に配置されている。各章は独立した話によって構成されるが、その各章は「性の過剰」と「性の欠如」のモチーフによって相互に接続され、作品全体で性の破綻の平等という主題に通じるモチーフを表示しているのである。

第三章では、『色里三所世帯』における対立する主人公と女性たちの執心を主題と想定して、その感情がいかなる方法によって作品世界に映し出されているのかを検討する。

作品を構成する各章には、要望と対応という話の枠組みが存在し、当該場面に登場するいずれかの人物に欲求不満という形で執心が現れていた。こうした登場人物の執心を映し出した五章によって構成される各巻（三巻）は、能や浄瑠璃に類似した五段構成であり、展開にも共通性が存在する。その展開は、中央の第三章を境として、おおよその前半では他者が執心によって消耗し（主人公優位、他者劣位）、後半では主人公が執心によって消耗するというものである（主人公劣位、他者優位）。しかも、前半と後半における主人公と他者の執心による消耗は対称関係にある。さらに、巻上が男性不足を理由に女性が執心を抱く世界（主人公優勢・女性劣勢）、巻中が主人公と女性の執心が衝突する世界（男女の性力の均衡）、巻下が女性不足を理由に男性が執心を抱く世界（主人公劣勢・女性優勢）である

ように、物語が後半になるにつれて執心の発生源と消耗が他者から主人公へと変化していくように、主人公の他者に対する立場は、優勢から劣勢へと変化していく。加えて、男女の執心が衝突する巻中を境に、巻上と巻下の同数の章では、主人公と他者における執心の発生と消耗が対称関係にある。冒頭と末尾からの二章においても主人公と他者の執心の発生と消耗が対称関係にある。こうした他者から主人公への執心の発生源と消耗の変化（主人公の他者に対する優勢から劣勢への変化）や、主人公と他者の執心の発生と消耗関係の対称関係は、主人公がもてあそんだ女性の執心によって命を落とすように、因果応報の道理と、執心が主人公に纏わりつくさまを表現したものである。やはり、主人公と女性たち（他者）の絡み合う執心という負の感情こそが、本書の主題なのである。

以上が、本論文で取り上げた三作における主題と、その表現方法である。

三作を比較すると表現方法における共通点が見えてくる。それは、独立した内容によって構成された各章が、主人公という存在に加え、もう一つの要素で有機的に関連づけられていたという点である。『椀久一世の物語』では、主人公の認識と行動の不一致という言わば倒錯という要素によって各章が関連づけられている。『好色一代女』では、「性の過剰」と「性の欠如」（性の破綻の平等）という要素によって各章が関連づけられている。『色里三所世帯』では主人公と他者の執心と消耗（因果応報の道理）という要素によって各章が関連づけられている。つまり、三作はいずれも、作品の主題とするところによって、独立した内容を持つ各章が、作品世界を網羅するように関連づけられているのである。こうした構造は、過去との対比により、作品の主題とするところを映し出す仕掛けであるのである。読者は、作品を読み進めていくと、過去に目撃した場面と類似・共通した場面に次々と遭遇し、その類似・共通点を思いかべると、作品の主題とするところが見えてくる。換言すれば、読み進めていくと既視感の高まりによって、主題とするところが徐々に映し出されてくるのである。

すなわち、浮橋康彦氏が『好色一代女』における隣接する章の話題の関連について、「俳諧的連想」（『好色一代女』構造上の諸問題『新潟大学教育学部紀要』一三号、一九七二年三月）と指摘するように、三作では俳諧的な連想と接続によって作品世界が構築され、その主題とするところが映し出されているのである。この表現方法・作品構造は、三作で用いられているように、西鶴の主題を映し出す一つの方法と言ってよいものである。